

キリスト教教育のなかの聖書

2015/10/10

同志社女子大学学芸学部 中村信博

0. はじめに
1. キリスト教精神
2. 新島襄のキリスト教理解
良心、自由、愛、真理、倜儻不羈
3. Mission の理解ー布教か使命かー
4. カリキュラム
「聖書」の位置づけ
5. 聖書によって披かれる対話可能性
「バベルの塔」 「天地創造」 「十字架を担ぐキリスト」
6. 現在の同志社女子大学から
看護学部設置、新島記念講堂（京田辺）ステンドグラス
7. おわりに

0.0. はじめに

同志社創立 140 周年／同志社女子大学 139 周年（1876.10.24 女子塾～）

人格を育む（良心、自由、愛の精神）

学校も機械的の製造場の漸漸流れ行くは、生徒の数も増したるより、自然の勢いにして、止む能わざるところもこれ有るべく候えども、小生平素の目的は、成るだけ法を三章に約し、我が校をして深山大沢のごとくになし、小魚も成長せしめ、大魚も自在に發育せしめ、小魚大魚、各その分に応じ、その身を世に犠牲となし、この美しき日本を早晚、改良して、主の御国、すなわち黄金時代に至らしめん事は、小生の日夜、熱氣して止まざるところなり。 1889（明治 22）年 12 月 30 日 横田安止宛書簡

（同志社編『新島襄の手紙』岩波文庫、2005 年、以下『手紙』No.94）

1.0. キリスト教精神

学校法人同志社寄附行為

第 1 章 総則

（目的）

第 2 条 この法人は、教育基本法及び学校教育法に従い、キリスト教を教育の基本とする（下線は中村）学校を経営し、もって教育の実を挙げることを目的とする。

同志社女子大学学則

第1章 総則

(目的)

第1条 本学は、教育基本法に基づき、学校教育法の定める大学として学術の教授研究を行うとともに、キリスト教の精神にしたがい（下線は中村）、円満な人格を涵養し、国際的視野に立って建設的に、かつ責任をもつて生活し得る女性を育成することを目的とする。

1.1. 基本精神 キリスト教主義、国際主義、リベラル・アーツ

学則（第3条）本学の性格は、リベラル・アーツ（Liberal Arts）の大学として規定する。

○キリスト教主義-自らのためだけでなく、他者のために学び生きる

本学は創立以来一貫してキリスト教の教えに基づく愛と自由の精神を建学の理念として受け継いできました。一人ひとりかけがえのない存在であり、自由に個性や能力を伸ばすことが大切です。しかし、自分らしく生きる姿勢が利己的なものになってしまわないためには、他者への愛を大切にしたい倫理観の形成、つまり「良心」を養う教育が重要であると考えています。本学では社会において「地の塩、世の光」となりうる女性の育成をめざしています。

○国際主義-世界的な視野に立って、人類共生に取り組む

同志社女学校は、その130年を越える歴史を通じて多くのアメリカ人宣教師が深く関わってきました。初期のいくつかの校舎が彼女らを介したアメリカのキリスト者たちの熱い祈りと献金によって建てられており、その中には現存して使用されているものもあります。

同志社女子大学の国際主義は、キリスト教の教える「世界の人びとは互いに兄弟姉妹であり、愛に国境はない」をモットーに、一人の人間としての自覚と、地球に生きる人類の一員としての視点をあわせ持ち、国際社会で活躍することのできる女性を育成します。

○リベラル・アーツ（Liberal Arts）-人間を育む

本学は開学時より、リベラル・アーツを教育の柱として導入しています。専門分野の知識や技術の習得を超えて、多様な分野の学問を修めることで広範な視野を養い、総合的な判断力（物事の本質を捉える力）と創造力を身につけることです。

同志社女子大学公式サイト（http://www.dwc.doshisha.ac.jp/campus_info/rinen/index.html）より抜粋

2.0. 新島襄のキリスト教理解

2.1. 良心

かつ伝道の余暇あらば、少しの翻訳等成され候ては如何。今日些少の障碍または少しくコンシヨンス〔conscience 良心〕を傷むる等の事のために、国家の大鴻益となるべき伝道に損失を与えしむるの時にあらず。

1880（明治13）年2月25日 小崎弘道（霊南坂教会牧師）宛書簡（『手紙』No.36）

conscience = con + science (scientia)・・・世俗知

συνείδησις (συνείδω = σύν + είδω)・・・道徳的判斷

（共通感覚）＝ 共通認識、共通感覚（≠信念や自己正当化）

自分だけの正しさを証明する基準ではなく、自分が正しいと考えることを、他者
考えや認識あるいは感覚と照らし合わせながら、自分の考えをいわば相対化して
周囲の人々とともに生きようとする努力のプロセス

* 「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」 (良心碑出典)

1889 (明治 22) 年 11 月 23 日 横田安止宛書簡 (『手紙』No.88)

* 同志社大学良心学研究センター (2015 年~)

2.2. 自由

会衆主義教会 (Congregational Church) の伝統

プロテスタントの教派、日本では組合教会。リベラルな教会運営、
アメリカの民主主義を揺籃。(教派性を拒否する教派性)

【参考】

日本における代表的プロテスタント教派の合同運動

- 1) 組合教会 (会衆派、同志社系)
- 2) 一致教会 (長老派)

1888 (明治 21) 年 11 月 10 日 N・G・クラーク

(N.G.Clark, 1825-96・アメリカン・ボード総主事) 宛書簡

新島は反対 (孤立無援 卒業生牧師たちは合同賛成)

- 1) 拙速
- 2) 非民主的的改革
- 3) 信仰 (教会) 内にヒエラルキー

2.3. 愛の精神

一貫する愛の精神 (行為)

「耶蘇教は何ぞ」と人、問われたれば、答えて曰わん、「愛以てこれを貫く」。(・・
・) 愛は忍び、愛は許すものにして、柔弱無力のものに見ゆるも、天下何人か愛に敵す
るものぞ。(同志社編『新島襄 教育宗教論集』岩波文庫、2010 年、23「愛とは何ぞや」)

1886 (明治 19) 年 5 月 30 日、仙台での説教

【参考】 新島八重の場合

「美德以為飾」福島県立葵高等学校 (旧福島県立会津女子高等学校)

あなたがたの装いは、編んだ髪や金の飾り、あるいは派手な衣服といった外面的なものであってはなりません。むしろそれは、柔和でしとやかな気立てという朽ちないもので飾られた、内面的な人柄であるべきです。この装いこそ、神の御前でまことに価値があるのです。(新約聖書・ペトロの手紙一 3 章 3~4 節)

2.4. 真理の囚人 (ある説教原稿)

真理ノ囚人コソ真ニ自由ノ人ナレ (『新島襄全集』第 II 巻、同朋舎 2000 年、451 ページ)

わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、
真理はあなたたちを自由にする。(新約聖書・ヨハネによる福音書 8 章 31~32 節)

新島こそ「自由ノ人」に憧れた「真理之囚人」であった。「自由ノ人」を産むために同志社は「真理ノ囚人」によって創建された。

(本井康博「新島襄の言葉」『同志社時報』No.106 1998年)

2.5. 倜儻不羈

「同志社への遺言」1890（明治23）年1月21日 午前5時半～7時10分前

…

- ・社員たるものハ生徒ヲ鄭重ニ取扱ふ可き事
- ・同志社ニ於てハ倜儻不羈*なる書生ヲ圧束せず務めて其の本性ニ従ひ之ヲ順導し以て天下の人物ヲ養成す可き事
- ・同志社は隆なるニ従ひ機械的ニ流るゝの恐れあり切に之を戒慎す可き事

…

*倜儻不羈とは、独立心や才気が強すぎて常識で縛ることができないの意。新島にかぎらず、明治の知識人たちに好まれた。

3.0. Mission の理解-布教か使命か-

3.1. 教育の使命

【参考】 1889（明治22）年5月6日 中村栄助宛書簡

- ・和歌山県議会に同志社大学設立募金のアピールをする中村への要点メモ
- ・中村栄助は（1849-1938）京都在住のキリスト教信徒、政治家、実業家。同志社理事、京都市議会初代議長（1889-90）、第一回衆議院議員

一、今の同志社は、宗教の一点は自由に任ず（すでに僧侶も入学しおる云々）。

3.2. 甲斐和里子（京都女子学園創立者）の場合

1893（明治26）年 同志社女学校入学を希望

「クリスチャンにはなれませんが、それでもよければ入学させてください」

「あなたが居づらくなければどうぞ」（松浦政泰教頭）

「キリスト教の神（ゴッド）と仏教のお釈迦様（ブツダ）とが握手をなさったようだ」

（松浦・甲斐和里子談）

籠谷眞智子『甲斐和里子の生涯』自照社出版、2002年、32～49ページ

佐藤八寿子『ミッション・スクール あこがれの園』中公新書 2006年、18～20ページ

4.0. 同志社女子大学における「聖書」科目

4.1. カリキュラム

4.1.1. 現状（2009年度～）

- 1) キリスト教・同志社関係科目（全学共通）

必修 4単位（「聖書 A」「聖書 B」）

選択必修 2単位（「キリスト教文化論」「キリスト教の歴史」

「キリスト教世界の探求」「近代日本と同志社」）

2) 学科提供科目

4.2.1. 宗教部の諸活動

- ・チャペル（礼拝）
建学の精神の共有化
- ・クリスマス礼拝、創立記念礼拝、卒業礼拝、宗教教育強調週間
- ・リトリート（春季、秋季）
- ・ワークキャンプ
- ・教職員聖書研究会
- ・ボランティア活動支援センター（2015. 4. 1～）

4.2.2. 科目としての「聖書」の性格

1) 聖書の読みづらさ

聖書の中で語られる物語と現実とのギャップをどのようにとらえればよいのかわからなかった。たとえば、人は塵からつくられたという聖書の記述（創二 7）と、科学的に見た人類誕生の過程は異なる。キリスト教を信じる人は、そのような科学的知識を否定し、聖書の言葉をすべて信じるべきなのか。

（読者の声・大貫隆『聖書の読み方』岩波新書、2010年、20ページ）

2) 共感による「世界理解」

しかし、その共感とは、聖書の一つ一つの文章や記述をそのまま真理として受けとることではない。まして、特定の教派的な読み方に賛成することでもない。そうではなくて、読者が聖書を読んで自分自身と世界を新しく発見し直す出来事（P・リクール、下線は中村）ことである。（大貫隆『前掲書』10ページ）

3) 重層する人称的世界

交換可能性／交換不可能性（他者的視点への理解）

4) 越境（超越）的世界への招き

聖書の喚起的機能への注目

4.2.3. 「聖書」の理念

1) NHK 大河ドラマ「八重の桜」（2013年）第49回

新島没後の同志社卒業式における山本覚馬の演説

「諸君たちは学業を終えそれぞれの仕事に就かれる。どうか弱い者を守る盾となって下さい。かつて私は会津藩士として戦い、京の町を焼き、故郷の会津を失いました。その償いの道は半ばです。今世界が力を競い合い、日本は戦に向けて動き出した。どうか聖書の一節を心に深く刻んで下さい。

…彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。（旧約聖書・イザヤ書2章4節）…

諸君は一国の、いや、世界の良心であって下さい。いかなる力にもその知恵であらがい、道を切り拓いて下さい。それが身をもって戦を知る私の願いです。」

「体験の相対化・普遍化」→現代世界が直面する課題

2) 大きな問いかけへの参加／応答

- ・地図と羅針盤
- ・多様で複雑な現実（世界）へのまなざし

3) 聖書的世界観からの問いかけ

われわれは、神が先立って〔人間を〕知ってくださる世界に、神が先立って愛してくださる光栄のうちに生きている。「わたしはあなたを母の胎内に造るまえからあなたを知っていた」（エレミア書1章5節）。われわれが神によって知られているということを感じ得ること、あるいは発見すること、これが人生の課題である（下線は中村）。われわれは、神をわれわれの思惟対象にすることによってではなく、神の思惟対象としてのわれわれ自身を発見することによって、神に接近するのである。（A・J・ヘッセル『イスラエル預言者下』教文館、1992年、374ページ）

→聖書を鏡のようにして自己を見つめる

4) 宗教的経験の場としての聖書（テキスト）

そのテキストは、エジプト脱出のような、神が歴史において顕現した聖なる出来事を伝える役割を果たすだけではない。そのテキストを読むことそのものが、テキスト自体における、またテキスト自体の宗教的なドラマとなるのである。神は今まさに聖なるテキストの中におり、したがって学習することは神と出会うことに等しい。それは大いなる宗教的親密さの瞬間である。

（M.ハルバタール著・志田雅宏訳『書物の民 ユダヤ教における正典・意味・権威』教文館、2015年、24ページ）

5.0. 聖書によって扱われる対話可能性

5.1. バベルの塔

1 世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。2 東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。3 彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。4 彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。

5 主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、6 言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。7 我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」

8 主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。

9 こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。（旧約聖書・創世記11章1-9節）

歴史的モデル ジググラト

- ・古代メソポタミアにおける神殿塔

- ・ P・ブリューゲル「バベルの塔」 (1563年)
農民画家、時代背景、ローマ・カトリック教会 (宗教) への批判
- ・ 連鎖する負の表象
「ガリバー旅行記」 (スイフト)、「天空の城ラピタ」 (宮崎駿)
→ 言語の創造 (分節) 的性格と破壊的性格

5.2. 「初めに」という時間

初めに神は天地を創造された (創世記 1 章 1 節)

אֶת הַשָּׁמַיִם וְאֶת הָאָרֶץ אֱלֹהִים בָּרָא בְּרֵאשִׁית
 地を そして 天を 神は 創造された はじめに

「初めに」= あらゆる物が存在するはるか以前の出来事であり、その時間。事物や物事の根源性。

→ 現実を越えた時間 / 想像の時間 (非現実)

「天地」 経験へと接続する世界 (経験知・現実)

「時間の遠近法」

この表題句に触れたとき、読む者はなんだかふしぎな感じにとらわれないだろうか。それは、ひと言でいえば、ほんとうにそうだろうか、という素朴な疑問であったり不安であったりするだろう。いったい、だれがそんなことを信じることができるのだろうか。疑問はつぎつぎとわき上がる。けれども、そのつきない疑問はいつの間にか、いまわたしたちが生きている世界の矛盾や、わたしたちが遭遇する現実の不条理のことで埋められているのである。「初めに」という、想像することもできないはるか遠い時間、ひょっとして、時間という概念すら成立しないかもしれないおそろしく遠い時間のことを考えていたはずなのに、わたしたちは「いま」という時間のことを漠然とした不安のなかで考えざるを得なくなっていることに気づかされるのである。この短い冒頭の一句は、はるかに遠い時間と「いま」という身近な時間をわずか一行の言語空間のなかにとじこめて対比しているとはいえないだろうか。(中村)

→ 自身の現実 (体験) を永遠の向こう側から問いかけるようにと促されている。

神の視点を借りると・・・

- ・ 『道徳聖書』 (13世紀フランス) 挿絵が描く神
- ・ ヒエロニムス・ボス (オランダ 1450頃~1516年) 「快樂の園」 (祭壇画)
が描く世界

5.3. P・ブリューゲル「十字架を担ぐキリスト (ゴルゴダの丘への行進)」

【参考】 レフ・マイエフスキ監督映画「ブリューゲルの動く絵」

(The Mill and the Cross. ポーランド・スウェーデン 2011年)

中央＝見えない場所

そして、(イエスは) 一人の子供の手を取って彼らの真ん中(下線は中村)に立たせ、抱き上げて言われた。わたしの名のためにこのような子供の一人を受け容れる者は、わたしを受け入れるのである。

(新約聖書・マルコによる福音書9章36-37節)

(ブリューゲルの時代) 十字架を担ぐキリスト

(現代) 子供／社会的弱者は見えているか

6.0. 現在の同志社女子大学から

6.1. 看護学部設置

- 同志社病院・京都看病婦学校 (1886年～(1897年佐伯理一郎が経営を引き継ぐ) 1951年廃校)
日本で2番目に古い(西日本最古)看護婦養成機関
(設立の目的) 「独一人ノ肉体ヲ看護スルノミナラズ其靈魂ヲモ慰安シ(下線は中村)之ヲシテ真ノ平康ト喜樂ヲ得」させる人物の養成
(京都看病婦学校設立趣旨)
- 看護(ケア)：患者に寄り添い、身体的・精神的に生きる力を回復したいともに希望する営為。
- cf. 治療(キュア)：医学的根拠によって疾病の原因を除去することで患者に希望をもたらす営為。
- 看護の系譜
ジョン・ベリー(病院長)、リンダ・リチャーズ(初代校長)、
新島八重(篤志看護婦)、不破ユウ(京大病院初代看護婦長)、
井深八重(ハンセン病看護、ナイチンゲール記章)
佐伯理一郎(佐伯病院、経営の継承)
「受けるより与えるほうが幸いである」(新約聖書・使徒言行録20章35節)

6.2. 新島記念講堂(京田辺)ステンドグラス

- 新島襄の海(海の思想)
「考える場所によって、考え方の性格が変わる。陸の思想と海(海)の思想とは、しぜんちがってくるものだ。海の上において、海から陸を見ること一年のあいだに、新島にとって、陸地の一部分である日本のそのまた一部分である一つの藩の風習が、遠いささやかなもの感じられてきた。海(海)の思想は、青一色をながめてくらししているために、また、天を見てくらししているために、陸の思想よりも、はるかに普遍的である。こうした毎日の考えの積みかさなりの上に、聖書の言葉が急に新しい意味をもって彼の心の中に生きて来た。」(鶴見俊輔「新島襄」和田洋一編『同志社の思想家たち上巻』同志社大学生協出版部、1965年、18ページ)
- 香港で購入した漢訳聖書から
「蓋神愛世甚至以其独生之子賜之俾凡信之者免沈倫而得永生」
(けだし神は世を愛することはなほはだしく、そのひとりごをもって、これをたまうにいたる。およそ信ずるものをして沈倫をまぬかれ、永生を得しめんためなり。 新約聖書・ヨハネによる福音書3章16節)

・大洋上の回心

この一行が新島の心にしみわたってゆくにつれて、故郷の景色や父母の姿形にたいする痛いほどのなつかしきは、人間すべてにたいする故郷、人間すべての父母の献身にかえられてゆく。土地によってちがう習慣をもつ中での特殊な郷土への愛を通して世界を見るのではなく、永遠にゆるがない普遍的な価値の体系の中に、世界の一つ一つのできごとが位置づけられ、日本もまたその中の一つの部分として見えるようになった。海をへだてて日本を考えるという条件そのものが、望遠鏡によって対象として日本をとらえるという、函館出発までは考えることのできなかつた別の見方に新島をつれだした。

船はインド洋を経て、アフリカの喜望峰をまわり、大西洋をこえて、一八六五年七月二〇日、ボストンについた。函館を出てから一年と三日。新島は、すでに別の人だった。」（鶴見俊輔「前掲書」21～22ページ）

7.0. おわりに

「神（隣人・社会・他者）との対話によって生きる」人びとの育成